【 5 】

氏　　名　竹中幸史（たけなか こうじ）
学位の種類　博　士（文　学）
学位記番号　文博第226号
学位授与の日付　平成14年7月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　文学研究科歴史文化学専攻
学位論文題目　フランス革命期ルーアンのジャコバン＝クラブ
——「政治的ソシアビリテ」と文化変容——

論文調査委員　（主査）教授 谷川　稔　教授 服部良久　助教授 小山　哲

論文内容の要旨

本論文は，フランス革命期オート＝ノルマンディー地方の中核都市ルーアンにおける政治空間の変容を，政治文化論・社会的結合（ソシアビリテ）論などの分析視角を援用しながら，政治社会史的に考察したものである。主たる分析対象は，ルーアンに設立されたブルジョワジーの政治結社（ジャコバン＝クラブ）の活動である。革命期，全国に6000以上設立された同様のクラブは，市民たちの単なる政治論議の場にとどまらず，新聞購読や選挙活動，革命祭典の組織化など，様々な啓蒙活動を行なう任意のアソシアシオンであった。また，これらのクラブは相互に情報交換の連絡網（ネットワーク）を形成し，一定程度，全国的に統一された政治行動を可能にする「回路」でもあった。

論者はまず，革命期のジャコバン＝クラブにかんする研究史を概観したうえで，問題の所在を確認している。従来，我が国でのフランス革命史研究が，ややもすればパリ偏重になりがちであったことにたいする反省から，本稿は地方政治とクラブの関係に照準を合わせようとする。フランス革命をすぐれて政治文化上の変革ととらえる論者は，中央から発信された「新しい」政治文化に地方のクラブはどう反応したのか。すなわち，その受容（もしくは反発）はどのようになされ，そのことがこれまでの地方政治のあり方をどう変えたのか，を見極めようとする。言い換えれば，地方クラブの活動の分析を通して，市民の政治参加の動態，中央と地方を結ぶ情報伝達のシステムのありかたを把握し，地方政治の権力構造とその変容を解明しようとする試みである。

こうしたアプローチは，論者によれば，革命期における市民の「政治化」を例証するだけでなく，ハバーマスの「公共空間」論の妥当性を問う作業でもある。またルーアンの事例をとりあげたのは，当地を中心とするオート＝ノルマンディーが，共和2年（1793～94年）に政治クラブの爆発的増加を経験した地域，換言すれば，革命期，もっとも典型的に「ジャコバン化」を経験した地域と考えられるからだと言う。

以下，各章の内容を要約する。

第1章「ルーアンの民衆協会」では，クラブの議事録，三部会陳情書，地方新聞，同時代人の日記，などの一次史料を用いて，クラブのメンバーの社会構成や地方政治との関係が考察される。職業分析によればメンバーの多くは中流ブルジョワジーであり，また革命の進展とともに彼らが，市議会に多数進出したことが確認された。93年春以後，革命裁判所の設置問題や監視委員会創設など，革命の推進にかんする諸問題について，クラブと市議会はしばしば衝突した。この二重権力状態は，ジロンド派系のフェデラリスム反乱や食糧問題などをめぐって93年秋まで続いたが，94年初頭にクラブの急進派メンバー，ピロンを首長とする市議会が成立することにより決着する。この「クラブ独裁」ともいうべき市議会の誕生により，中央のジャコバン独裁はスムーズにルーアンに浸透していった。その過程で，クラブ自体が，国防，革命祭典の組織，治安維持活動など公共的活動を展開し，「公権力」化していったことになる。

クラブのこうした諸活動を全般的にみると，そのメンバーは無論，メンバー以外の市民にも革命政治に参加する機会を与え，市民による「政治主体」化を促進する場になったことはたしかである。その限りではクラブは「市民的公共空間」に近

い政治的ソシアビリテであった。しかし共和2年，クラブが「私的な」アソシアシオンの性格を脱し，「公的」機関化したことによってその自律性を喪失すると，クラブが本来有していた，公権力を批判する能力は失われてしまった。この時点で，もはやルーアンのクラブは，ハバーマスの言う，自由な議論に基づき「世論」を形成して公権力を批判するような「公共空間」モデルから，遠く逸脱していることになる。

第2章「政治結社のネットワークとフランス革命」では，ルーアンおよびパリのクラブの議事録，公安委員会史料集などを用い，ルーアンのクラブが形成した情報交換のネットワークの分析を通じて，当地とパリおよびオート＝ノルマンディー諸地域との関係が考察される。革命初期，ルーアンのクラブは，その穏健的な活動ゆえに，パリのジャコバン＝クラブやオート＝ノルマンディーの他都市のクラブに不信感を抱かれていた。ジャコバン独裁期に至っても，ルーアンのクラブはパリのクラブに信頼されていないが，その一方で，オート＝ノルマンディー内に叢生したクラブには，治安維持や食糧問題，祭典組織にかんする様々な指示を出すようになる。すなわちルーアンのクラブは，事実上，当地方のクラブの盟主たる地位を確立し，農村部のクラブを支配する立場になっている。これまでジャコバンのネットワークは，パリを頂点とする直接的・集権的な命令系統であったというのが通説的理解であった。しかしオート＝ノルマンディーの事例からは，ジャコバン独裁期にいたっても，ネットワークが地方の主要クラブを中継した間接的・分権的な性格を残しており，ルーアンのような「信頼するに足らない」クラブにさえ依存せざるを得ない不安定なシステムであったという。こうした帰結について，論者は次のように考察する。革命期には，パリの政府は一貫して中央集権体制の確立に努めた。このタテの支配に対し，革命初期から，「フェデラリスム」とよばれる，クラブや自治体の自発的なヨコの連携があり，分権的・直接民主政的契機が共存していた。ところが，1793年に，フェデラリスム反乱に脅威を覚えた政府やパリのジャコバン＝クラブは，同じく「フェデラリスム」的性格を内包していた地方クラブのネットワークの統制を試みるようになる。しかし内外の反革命危機をかかえた当時の状況下では，地方クラブの政治的動員力は不可欠であり，粛清は不十分なものとなる。それゆえネットワークの統制は，中継クラブの整理・再編に留まり，かえってネットワークの多元化，分権化という逆説的帰結をもたらしたのだ，と論じる。

第3章「ルーアンにおける革命祭典の展開」では，主としてシャルドン編の革命祭典史料集を用い，90年から94年までのルーアンにおける革命祭典が考察される。論者は，ミシェル・ヴォヴェルが提示した変容モデルを援用しつつ，革命祭典の種類，行列の構成・コース，組織者，シンボル，スペクタクルなどを可能な限り再現して図表化し，「祭りそれ自体」に示されるルーアン市民の心性の変化を分析している。

祭典の様子とその変容は，次の4段階にわけて整理される。第1期（1790年から91年）においては，革命祭典における儀礼や行列の構成およびそのコース設定に，宗教的・軍事的な要素が顕著に現われている。祭典の主役はカトリック聖職者と国民衛兵であり，一般市民は観客以上の存在ではなかった。しかし，第2期（1792年）になると，祭典儀礼に占めるキリスト教の重要性が低下し，代って市議会など行政関係者の存在感が増すようになる。また「自由の木」「ラ・マルセイエーズ」「自由の像」などの新しい革命的シンボルが導入され，一般市民の祭典参加が進んだことを示している。第3期（1793年から94年春にかけて）には，キリスト教的要素の一掃，祭典の「民主化」は一段と進行する。なかでも93年夏以降の祭典には火刑の儀礼が登場するが，論者はこれを旧体制の破壊の象徴的表現として，とくに注目している。さらに同年秋以降になると，行列のコースがルーアンにおける革命名所をたどるように設定されたり，祭典に「自由の殉教者」崇拝が盛り込まれるなど，革命礼拝の浸透ぶりがうかがわれる。そして，第4期（1794年夏以降）になると，祭典は「公教育」の一環として組織されるようになるが，そこでは全市民が公的行事として革命を祝うこと，いわば全体一致の「ユートピア」の創造が期待された。こうした国民祭典では即興性や地方色が否定され，これ以後，祭典は，「下から」の自律性を失って型どおりの公民教育儀礼に収斂してゆくようになる，と結んでいる。

第4章「ルーアンにおける革命祭典とジャコバン＝クラブ」では，前章で扱ったルーアンでの祭典の展開と，当地のジャコバン＝クラブの活動をあらためて比較検討し，地方における政治文化の変容とソシアビリテとの関係を論じている。ここでは，史料として未公刊のルーアン市議会議事録を克明に分析しているのが特筆されよう。論者は，革命初期のルーアンのクラブは，祭典に積極的に参加していないが，92年以降，「自由の木」植樹とクラブ議場内で独自に祭典を組織することによって，政治文化の闘争を本格的に開始したという。1793年以後はとくに祭典の組織主体として深く関与するようになったが，この過程には，パリの中央集権化政策に追従することを余儀なくされたルーアンの食糧行政上の位置，当市での非キリ

スト教化運動と革命礼拝の進展，さらには穏健派主導の市議会と急進派に傾斜したクラブの対立，そして後者の勝利，という複雑な政治情勢が投影されていたことを明らかにする。1794年１月に組織された市公教育委員会も，クラブのメンバーが主導権を掌握した。以後，ジャコバン＝クラブのイニシアティヴの下に，この委員会と市議会をあわせた三者が，祭典をはじめとするルーアンの「公教育」全般を統制し，政治文化の革命を推進してゆくことになる。

だが，祭典が革命政府によって，人間の「再生」をめざす教育として位置づけられた以上，地方クラブも効率よくそれを遂行する公的機関として活動しなければならない。こうして1794年夏には，綿密なプログラムにのっとった「ユートピア」的祭典が組織されるが，それは本来祭りが持っていた「下から」の自発的エネルギーを放棄していくものであった。このような「上から」の全体一致というフィクション，「予定調和的な」空間の誕生は，第１章で考察した，自由な議論なき「公共空間」の誕生とパラレルである。両者はともに革命期に新たなソシアビリテを生み出したが，1794年春以降，独裁の政治文化のなかで硬直化し，変質してしまったのだと説く。にもかかわらず，クラブが地方政治における要石であったこと，その意味で，クラブが新しい政治文化の担い手であったことに変わりは無く，たとえ，革命祭典に代表される彼らの活動が短命に終わらざるをえなかったとしても，市民の「政治化」を促す触媒としての機能を果たしたのではないかと結論している。

論文審査の結果の要旨

周知のように，フランス革命に関しては，内外を問わず圧倒的に分厚い研究蓄積が存在している。しかし，かつて「戦後歴史学」の一翼を担った「ジャコバン史学」の伝統も，1980年代以降しだいに色褪せ，フランス革命二百周年とソ連邦の解体を境に，その存在感をほとんど失ってしまったかに見える。とはいえ，フランス革命が近代世界にもたらした意味の大きさ自体は否定すべくもない。むしろイデオロギー過剰の時代から解き放たれて，ようやく冷静な歴史研究の対象となりつつある今，その意味はさまざまな角度からあらためて問い直されるべきだろう。近年のフランス革命研究では，一段と細分化された地方レヴェルの政治史への沈潜が見られる一方で，その総体を文化＝社会史的視角から再解釈しようとする動向が顕著である。たとえば，ミシェル・ヴォヴェルの言うように「フランス革命の10年間は人びとの心性をどう変えたか」，それは新しい人間を生みだしたのかどうか，そこから新たなソシアビリテ（社会的結合関係）が生成したのか否か，といった「構え」の大きな問題設定である。

本論文は，この対極的な研究動向をともに踏まえ，文化＝社会史的方法を援用しつつ地方史と真正面から取り組んだものである。論者はまず，パリ偏重気味の先行研究を批判し，分析空間をオート＝ノルマンディー地方の中心都市ルーアンに設定する。主たる分析対象は当地のジャコバン＝クラブであり，膨大な一次史料を駆使してその活動の推移を克明に掘り起こしたうえで，政治社会史的考察を加えている。

論者によれば，革命期に，全国で6000以上設立された同様のクラブは，市民たちの単なる政治論議の場にとどまらず，新聞購読や選挙活動，革命祭典の組織化など，様々な啓蒙活動を行なう任意のアソシアシオンであった。また，これらのクラブは相互に情報交換の連絡網（ネットワーク）を形成し，一定程度，全国的に統一された政治行動を可能にする「回路」でもあった。フランス革命をすぐれて政治文化上の変革ととらえる論者は，中央から発信された「新しい」政治文化に地方のクラブはどう反応したのか。すなわち，その受容はどのようになされ，そのことがこれまでの地方政治のあり方をどう変えたのかを見極めようとする。言い換えれば，地方クラブの活動の分析を通して，市民の政治参加の動態，中央と地方を結ぶ情報伝達システムのありかたを把握し，地方政治の権力構造とその変容を実証的に解明しようとする試みである。

論者の問題意識はたいへん明快であり，偏狭なジャコバン史学的地方史に埋没することなく，政治文化論やソシアビリテ論をベースに大胆な「公共空間」論をも展開しており，この「構え」の大きさが本論文の第一の特徴である。加えて，この作業がモナ・オズーフやリン・ハントのような記号論的解釈に飛翔するのではなく，同じ革命祭典を論じても，地方政治の枠組みをふまえて歴史実証的に分析されているところが評価されよう。例えば1793年秋にルーアンのクラブが主導した革命祭典では，パリの中央集権政策に従うことを余儀なくされた当地の食糧行政上の位置や「非キリスト教化」と革命礼拝の進展，さらには穏健派市議会にたいする急進派クラブの勝利という複雑な政治状況が克明に読み解かれる。論者が直接ルーアンの文書館に赴いて，未公刊の市議会議事録をはじめとする一次史料と取り組んだ成果であり，その努力は高く評価されて良い。

とはいえ，本論文にもいくつかの問題点がないわけではない。たとえば，ジャコバン＝クラブは，政治状況の急進化にともなって刻々と性格を変えていったのだが，本論ではフイヤン派やジロンド派追放以前のそれと，モンタニャール派（ロベスピエール派）独裁以後のそれをともに「ジャコバン＝クラブ」と総称し，クラブ一般の性格を論じている部分が見られる。「自生的・分権的・公共空間」としてのクラブ論を展開するなら，ゆるやかなアソシアシオンであった時期と，公権力を掌握して行政機関化した時期とをもっと峻別して論じるべきではなかったかと思われる。また論者は，革命初期のフェデラリスムがもっていた自生的・連合主義的性格を評価しているが，これと，1793年6月に追放されたジロンド派が依拠した「連邦主義」としてのフェデラリスムとを同一視しているかに見える記述も行っている。

これらの「誤解」は，パリのジャコバンに連動して惹き起こされた地方支部での対立・葛藤（党派闘争）をより具体的に掘り下げたうえで，フェデラリスムやネットワークの性格を論じていれば，避けられたもののように思われる。たとえば，中央の指令を帯びた派遣議員とルーアンのクラブ指導層との軋轢などが具体的に分析されていれば，中継拠点としてのルーアンの「生の姿」がいま少し明らかになり，パリと地方との双方向性もより鮮明になったのではないがと惜しまれる。ルーアンを中心とするオート＝ノルマンディー全域のジャコバン＝クラブ・ネットワークを論じたダニエル・パンゲらの先行研究に，もう少し敬意を払う必要があったのかもしれない。

ソシアビリテ論としてみた場合も，地方のジャコバン＝クラブを「新しい政治的ソシアビリテ」として位置づけるには，アンシャン・レジーム期の社会的結合体が日常的儀礼や地方政治のなかで果たしていた機能との差異をより明確にしておく必要があるだろう。また俗にいうフリーメーソンとジャコバンクラブとの重なり合いなどにも補足説明があれば，立論に説得力が増したであろう。

もっとも，望蜀の嘆をつづればきりがない。むしろ膨大な先行研究の壁をものともせず，真っ向から大きな課題に切り込んでいこうとする論者の勇気と努力は大いに評価されて良い。近年，研究対象の周辺化（あるいは空洞化）現象が著しいヨーロッパ近代史研究にあってはなおさらである。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお，2002年6月17日に調査委員3名が，論文とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。